



ウメバチソウとシラヒゲソウ

神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員 勝山 輝男

シラヒゲソウ 2021.8.30 金時山

ウメバチソウ *Parnassia palustris* とシラヒゲソウ *P. foliosa* はニシキギ科ウメバチソウ属の多年草で、2種とも箱根では限られた場所に生育しています。ウメバチソウ属は日本には種レベルでこの2種のほか、高山植物のヒメウメバチソウ *P. alpicola* の3種が分布します。

ウメバチソウは日当たりの良い湿地に生えるとされ、箱根では仙石原湿原に多く、仙石原以外では、外輪山など、登山道沿いの芝地に稀に見られます。9~10月に径2~2.5cmの白色5弁花が咲き、花弁は全縁で茎葉は1個です。丹沢でも尾根上の芝地に点々とありましたが、ニホンジカの採食圧が高く、『神奈川県植物誌2018』の分布図では1988年以降の分布点は一つしかありません。また、1970年代くらいまでは横浜や鎌倉周辺の丘陵地からも記録されていますが、いずれも絶えてしまいました。県内分布は衰退が続いているので、神奈川県のレッドデータブック(2022年)では絶滅危惧IB類に分類されました。

シラヒゲソウは箱根では金時山の湿った岩場にあり、8~9月に径2~2.5cmの白色5弁花をつけ、花弁の縁は糸状に細かく裂け、茎葉は2~6個あります。中央火口丘の神山周辺で1960年代に採集された標本が残されていますが、最近は見つかっていません。丹沢では沢の源頭や渓谷に湿った岩場が多くあるので、塔ヶ岳から大室山までの主稜線や同角山稜、玄倉川渓谷に稀ではありません。岩場に生えるため、ニホンジカの影響もなく、当面、減少要因はないと考えられ、神奈川県のレッドデータでは取り上げられていません。しかし、箱根では金時山周辺のみにあり、大切に見守っていく必要があります。また、神山や冠ヶ岳周辺にはシラヒゲソウの生育適地があり、今後、再発見されることを期待したいと思います。



ウメバチソウ 2024.10.15 仙石原



シラヒゲソウ 2021.8.30 金時山

これまでウメバチソウ属はユキノシタ科に属していましたが、DNAを用いた遺伝子解析で作られたAPG分類体系ではニシキギ科に移されました。日本産のニシキギ科はニシキギ属、モクレイシ属、ツルウメモドキ属、ハリツルマサキ属、クロヅル属があり、いずれも木本植物で、草本はウメバチソウ属に限られます。ウメバチソウ属がなぜニシキギ科なのか、直感的にわかる共通点が見当たりません。

箱根ジオ散歩②

箱根で見られる流れ山

箱根ジオパーク推進協議会事務局 笠間 友博

今回のテーマの「流れ山」は、学術用語です。千葉県流山市の流山と読みは同じ「ながれやま」ですが、学術用語では「れ」が入ります。「流れ山」は、文字通り別の場所から流れて来た山で、元々そこにあった山ではありません。山を流した現象は、山体崩壊という山の形が明らかに変わるほどの大崩壊で、通常火山で起きる現象を指します。火山は水蒸気爆発など、山体内部から破壊されることが多いので、大崩壊につながります。山体崩壊では、大小さまざまな火山体の破片が岩屑（がんせつ）なだれとして流れ下りますが、巨大な破片は、岩屑なだれ堆積物の表面に突出して小山を形成します。これを「流れ山」と呼んでいます。巨大な破片が、岩屑なだれ堆積物の厚さより大きければ、突出するのは当然ですが、巨大な破片を埋めるほど岩屑なだれ堆積物が厚くても、破片が浮くように表面に出ることがあります。七味唐辛子を振ると、表面に山椒や胡麻の実が出てくるのと似た現象で、ブラジルナッツ効果とも呼ばれています。大きな粒子の隙間には、より小さな粒子が次々と落ち込むので、大きな粒子は下方に行き場を失い、上に浮いてきます。子どもの頃に、校庭の石拾いで拾った石も、同じ原理で浮いてきたものです。

箱根火山では、約3000年前に神山が山体崩壊を起こしました。その崩壊跡が大涌谷です。岩屑なだれ堆



積物は姥子から仙石原に広がり、早川を堰き止め、芦ノ湖をつくりました。この岩屑なだれ堆積物の上に、「流れ山」がみられます。“金太郎岩（図1）”、“大石（図2）”、“船見岩（図3）”、“飯塚（図4）”などがその例で、箱根ジオパークのジオサイトにもなっています。前者2つは神山の溶岩がむき出しへになっていますが、後者2つは土に覆われ木が生えています。植物が繁茂すれば、表面を覆う土（土壤）の層が次第に形成されるので、流れ山が位置する場所の気象条件などが影響している可能性がありますが、船見岩は芦ノ湖を見下ろす場所であったとか、飯塚は箱根用水の測量で使われたという話があり、登りやすいように土を被せた可能性もあります。



史跡そして文化財 『箱根の古城群』を見なおす

＝＝＝遺構の整備と活用のために＝＝＝

田代道彌

○どこにどんな古城が？

箱根は「天下の嶮」だから、古城が少くないのは当然であろう。しかし現在一般によく知られ多くの人が訪れているのは「山中城」・「足柄城」・「石垣山一夜城」などで、これら諸城の位置は三島市・南足柄市・小田原市などだから、厳密には箱根の城ではない。

それでは箱根には城址はないのかと云えば、実はススキやハコネダケに埋まりながらも、箱根の歴史にとって重要な古城址は決して少なくはない。ただ残念ながらそれらは文化財や史跡としての指定をまだ受けたことがなく、行政も遺構の所持者もそれを充分に知らず、今も草木に埋没したままである。文化財は周知性をたかめることが必要である。箱根の古城址を再び世に出すことは、これらの遺構が手篤く管理されることを前提とするが、どの古城址も現状はほとんど未着手の状態である。

1. 宮城野城址——標高626m、宮城野から俵石へ通じる林道の一角に『大和尊伝説』の石碑があるが、そこから国道138号線までの間を県企業庁の送水管が敷設されていて、その送水管に串刺しにされた形でこの城址の三箇の曲輪が配置されている。天正18年（1590年）の秀吉来攻時にはすでに使用されていないから、それ以前の大森氏時代の遺構であろう。

2. 進士ヶ城址——標高806m、芦ノ湖畔から駒ヶ岳に架かるロープウェイの架線が、県道と立体交差する直下の地点に位置し、上下二郭を三条の空堀で防護している。古く芦ノ湖から直登して神山・駒ヶ岳の鞍部に登り、それより芦ノ湖に達する石道が存在したことをこの城址は証明しているように思われる。『太平記』の箱根水飲峠合戦などの時代に比定すべき遺構であろう。

3. 湯坂城址——標高275m、湯本温泉の背後の「鎌倉古道」に沿って小規模ながら6箇の曲輪が造成されている。その規模から大森氏時代の遺構と推定される。現在この古道は早川方向に下るが、本来はこの城址をへて須雲川合流点の方向に通じていたのである。

4. 屏風山囲郭——標高948m、箱根関所の背後に屏風山の稜線の一画に構築された平坦地を占有する。60m×43mの方形の土壘をめぐらせ、土壘の敷幅は5mを測る。秀吉来攻当時北条五代当主直はこの地点まで視察に来ているがついに山中城にまで視察の足を延ばすことがなかった。

5. 塔ノ峯城址——標高566m、塔ノ沢阿弥陀寺背後の塔ノ峯山頂に位置し、頂部より東へ30m×20mの削平面と、その外側に幅3mの腰曲輪が遺存する。また久野林道方面から山頂にかけて東西に4箇所に低平なピークが並んでいて、明神岳・明星岳方面に備えていることが知られる。この稜線を東にたどると先端は小田原城に達するので、塔ノ峯は早くから重視された要害の地なのであった。

6. 鷹ノ巣山城——「底倉村書上」などにこの城が伝承されていて、事実天正18年戦役には西群がここまで進出しているらしいが、城の遺構は未発見である。筆者は古く隣接する浅間山頂の広大な平坦面をそれに比定したが、古く浅間山は「前鷹ノ巣」と呼ばれていたことに因ったのであった。今後の調査が期待される謎の古城である。

以上のはか小田原市域ではあるが実質的には箱根の域に属する箱根ターンパイク沿いの『御所山城址』、湯河原町に属する『土肥城址』なども、城の機能やその位置から考えると、当然箱根諸城に含まれるべきものである。また城ではないが湯本畠ノ平の「利休山の家想定地」なども、桑田忠親・野上弥生子の文学作品にその存在を指摘されながら、実地に位置が明示されていない状況も惜しまれてならない。

○町指定など陽の当たっている文化財へ

高い石垣と広い水面の水濠とで構成されるのは『近世城郭』であって、それは東国では江戸時代の遺構である。それに対して空堀と土壘を主体として構成されているいわゆる山城は『中世城郭』と云って近世の城に対比される。そして上記した箱根諸城は、すべてこの中世城郭に属し、つまり土壘と空堀を基本として築造されている。

ところが一般には、石垣や白亜の建物がないと城と認識されない風潮がある。しかし観光的に留まらず史跡や文化財として城址を見れば、その遺構は当然石垣や水濠より古く、さらに一層雄弁にその土地の歴史を物語っていると云えよう。ただ惜しいことに、観光的といえる地点まで、現在は管理も解説も到達していないだけなのである。

そしてその結果、現状では上記諸城はみな深く草やハコネダケの中に埋もれたままである。たとえば進士ヶ城跡を筆者が探したのは高校生の時だが、第二次世界大戦の五年間を過ぎた後だが、戦前に建てた指導標がまだ立腐れの姿で残っていた。しかし現在遺構は放置され、その入口を探すことさえ容易ではない。

遺構の周知性を昂める目的で、まずは箱根町指定など行政の対応を前提とし、ついで定期的な除草などの管理計画の樹立、これに伴う解説などが必要になる。各城址の行政による現状調査をまずは切望する次第である。

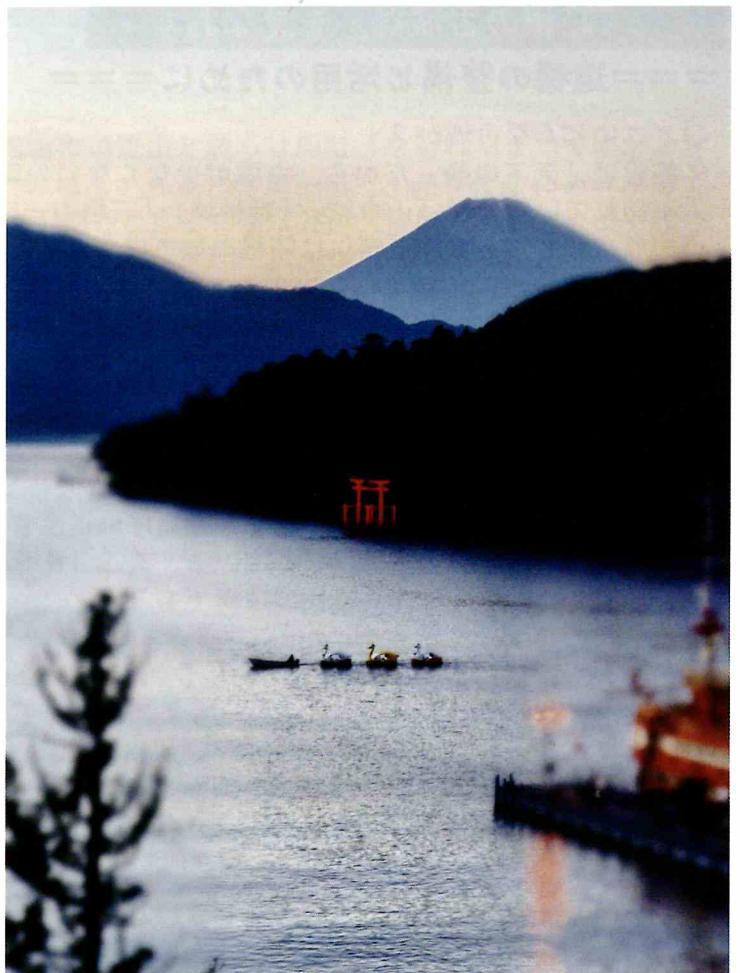
（箱根を守る会理事・小田原の城と緑を考える会長）

今「残すもの、守るもの」

慶應義塾大学非常勤講師 安藤 万奈

落ち葉の季節がやって来た。我が家に向かい側にある3本の桟の木の葉が、風に吹かれて我が家に舞い込み、積もる。この3本のは遠くから見ると1本の大木のように見えるように仕立ててある。昭和の時代のある年、この桟が、ある日突然伐採されそうになった。それを発見した私の父が、時の町長に直訴、伐採を止めたと聞いている。それからも、病気になり、枝を落とさなければならなくなったりしているが、今も、春には新緑を、夏には木陰を、そして秋、落ち葉掃きは大変であるが、自然の中に暮らしているということを実感させてくれる。

「箱根の自然を大切に」という標語は、小さい頃から常に聞いている。残さなければならぬものと新しく進化させていくべきものは、どの分野においてもあると思う。ただ、特にコロナ以後の箱根を見ていると、その双方が壊されていっている気がしてならないのである。国立公園の中にある箱根に、景観にそぐわない、ただ単に損得のみを考えた建物が多く建てられている。風の道、水の道といった自然界の法則を無視して、建てられている建物も多く受けられるような気がする。



私の研究基盤である国スペインに、「パラドール」という20世紀初頭に観光振興を目的とした国営ホテルが、1991年に株式会社化し、文化財の保存と観光振興を担う国営ホテルチェーンとして、今や全国に90以上の店舗を展開している。歴史的建造物（古城、修道院、貴族の館等）を改装して使用する他、地域活性化のために景観地に新たにその土地に見合った建築様式で建築するものもある。そこで提供される食事もまた、その地域特有のものといったように、観光客にその土地の歴史や文化、さらには自然に親しみ、触れる機会を提供している。箱根でも地域環境との共生という部分で、付加価値の高い文化施設ともいえるような宿屋が存在している。何か参考に出来るものはないのだろうか。

我が家には、バーニーさん所縁の品がいくつかある。その頃の元箱根村の村長をしていた私の曾祖父とバーニーさんとが親しくしていたことから、そういう品が残されているのである。

バーニーさんとは、現在、4月第2土曜日に開催されている「ケンベル・バーニー祭」のあのバーニーさんのことである。元箱根の、現在御殿公園となっている場所に別荘を持ち、箱根を愛し、自身の名を記さずに、「新旧両街道の会合する地点に立つ人よ此光榮ある祖国をば更に美しく尊くして卿等の子孫に伝えられよ」という石碑を残しているあのバーニーさんである。別荘の庭では、少し近寄りがたい趣の洋館ではあったようだが、近所の子どもたちが遊び、私の叔母たちには着せ替え人形を贈ったり、芦ノ湖で釣りにいそしんだりと箱根という土地を十二分に満喫し、そしてそこに住む者も愛していた。

今、そのバーニーさんの精神は引き継がれているのだろうか？何を残して、何を新しくしていくのか。箱根に生まれ、育ち、住む者として、少し先のことを想像して、変化に富んだ土地柄を持つ箱根を唯一無二の素敵な場所へと導くことはできないだろうか？今なら、まだ間に合うかもしれない。